

2025年3月の総評に代えて

○林 桂○

●汐見りら●(東京都 24歳)

胸の矢を抜かずにうたえ
血の色は花の色より遠くへ届く

【評】かつて読んだ佐佐木幸綱の「男歌」を思い出させる。自己を鼓舞し、また読者を鼓舞する。傷を負っての発語こそ遠くの傷ついた胸を癒やす力を持つ。

●有野 水都●(東京都 17歳)

羊羹を薄めに切れば春の昼

【評】春昼のあでやかなイメージが「羊羹を薄めに切れば」に込められている。もののうい感じもある。

●ムクロジ●(群馬県 17歳)

三月の醤油をはじく目玉焼

【評】「三月」は春の明るくなり始めた世界

を反映しているのだろう。俄に坪内稔典の「三月の甘納豆のうふふふ」を思い出す。実は、これは一月から十二月までの連作の中の一句。ムクロジ氏の「目玉焼き」の十二ヶ月の作品を読んできたい誘惑に駆られて思いついたのである。

●檜野 美果子●(宮城県 36歳)

透明にはみ出すボンド木の根明く

【評】「木の根明く」は歳時記に載らないことの多い季語。三橋敏雄に「穴あいてとけてみるなり雪の原」があるが、雪原は木の根回から解け始めて、木の回りに穴があく。それを言う。掲句は取り合わせ句だが、接着するものの周りにはみ出したボンドを類似と見立てている。

●川上 真央●(東京都 18歳)

めぐすりの光まぶしく
すこしだけ
溺れてみたい春風がある

【評】青春歌としてそれこそ眩しい。若いときにしか書けないものは若いときに書いておかなくてはならない。

●鷺浦 るか●(富山県 63 歳)

んめ、んまと父はいった梅と馬

【評】最初「んめ」「んま」は、「うまい」の口語として読んだ。病床にでもある老いた父が美味しそうに食べながら発する言葉であろうかと。しかし「梅と馬」とが出てきて誤読が分かった。「うま」「うめ」を、父はこう発音していたというのである。文字的には「むめ」「むま」と表記されることが多い。かつて「むめ」という女性名があったが、それが「うめ」であることを知ったのは随分後のことであった。こちらの方が、由緒正しき発音だったのである。地方にはこの発音が、方言のように残っているところがある。作者の父もそうだったのである。二百話を伝えるという民話の語り手の話を聞いたことがあるが、彼女は「あるく」を古語の「ありく」と発語していて、感動したことを思い出した。

●白鳥 陽太●(神奈川県 20 歳)

バターを切り分ける

パンに塗る

バターの残りを冷蔵庫にしまう

すこし泣く

【評】最初の三行はいつもに変わらぬ朝食の様子であろう。恐らくいつもと違う4行目「すこし泣く」の理由は分からない。しかし、こういう朝を交えながら、私たちは生きている。

●ちゃじょ●（岐阜県 17 歳）

はじめまして、よろしくね参考書
私が三代目の持ち主です

【評】先輩は使った参考書を後輩に譲って進学していったのだ。三人目の使用者となった作者の「はじめまして、よろしくね参考書」に受験への決意がある。もちろん、前の二人はめでたく合格しているのだ。そんな合格の願いも込めて譲られた参考書である。先輩の書き込みがヒントになり励みになるはずである。

●回る卵●（宮城県 21 歳）

花束の抱きしめ方が分からない

【評】口語詩句では、ジャンル別けはあまり意味がないと思っている。ジャンルを意識する前に、作品に対して。私は季語の有無で俳句を読まないで、作者の思いが俳句にあ

るのか川柳にあるのか、判別することがない。しかし、どうも読むツボには若干の違いがあるようで、やはり俳句読みの私には、川柳の読みには知らず知らずのうちに厳しくなっていたようである。反省。さて、掲句を作者は俳句として書いたのか川柳として書いたのか。私は川柳ではないかと思いつつ読んだ。貰い慣れない花束の扱い方の不首尾である。最近、川柳かと思われる投稿作品が多く、レベルも高い。

●福地 餅子●（東京都 37 歳）

真っ白な生クリームが桜味
こういう女になるね
じゃ、また

【評】勝手な想像である。「真っ白な生クリームが桜味」は、男が女性に求めていた理想の在り方。とてもそうはなれないと思った女の別れの台詞が「こういう女になるね」。裏には現在の私は、こういう女ではないという抗議の想いも籠もっていそう。「さよなら」ではない「じゃ、また」という別れの言葉には、そんな女になったら会いましょうという含みを持たせながら、もう会うことはないという意味がありそう。